テーマ展

資料館のお宝2021特別編　泥炭地と泥炭ストーブ
日 4(月)～3/31(水) ※火曜除く
所 いしかり砂丘の風資料館(弁天町30・4)

泥炭地と泥炭ストーブ

本格的な冬に入り、暖かい部屋から出たくない、そんな日々がやってきました。北海道は冬にストーブで部屋を暖め、半袖で過ごすのが当たり前。そんなローカル情報をテレビで見かけることもあります。現在、暖房の主流は石油、あるいはガスストーブで、最近では床暖房完備の住宅も多いのではないでしょうか。

ここでは昔、石狩の人々を暖めていた「泥炭」について触れたいと思います。泥炭(ピート、草炭)とは、水分が多く気温が低いために植物の特にヨシ、スゲ、ミズゴケなどが分解されずに積もってできたものを言い、排水後もこの泥炭が厚さ20㎝以上覆っている土地のことを泥炭地と言います。

北海道は、この泥炭が形成されやすい自然環境のため、全道各地の河川下流域を中心に泥炭地が広く分布しており、道内の泥炭地の総面積は約20万haにも及ぶとされています。石狩もその一つで、花川や樽川、生振、北生振、美登位地区に分布しています。現在は改良が進み、その多くが農地となっていますが、本来、泥炭地は農業には向かず、沈下や崩れやすいことから河川周辺の開発の際にも大きな課題となりました。

一方で、泥炭は可燃物であるため、大正時代には燃料として使われるようになりました。石狩でも泥炭が採掘され、乾燥させた後、燃料として用いられました。特に生振の泥炭は質が良く、ニッカウヰスキー余市工場でも麦芽の香り付けや蒸留の際に活用されました。第2次世界大戦前後には石炭が不足し、泥炭が主な燃料として使用されるようになりましたが、昭和30年代後半には石炭・石油が安価になり、使用されなくなりました。

現在では「泥炭地」という言葉は耳にしますが、実際に泥炭や泥炭ストーブを見ることはなくなり、昔の暖房器具というと主に石炭ストーブなどが取り上げられます。いしかり砂丘の風資料館では、この「泥炭」ストーブのほか、泥炭採掘に使われたスペード、そのほか冬に関連する資料を4日(月)より展示します。この機会にぜひご覧ください。

(坂本恵衣)

泥炭ストーブ

スペード

石狩市学芸員
坂本恵衣 Kei Sakamoto
専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史的変遷などを研究する。

問 文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館